

工場ホテルができるまで 相談絶えぬ鉄工所 町工場 後継ぎニュータイプ（４）

2019/7/15 2:03 (2019/7/19 2:00更新) | 日本経済新聞 電子版



東京都大田区の京急蒲田駅近くの住宅街に4月、「ホテルオリエンタルエクスプレス東京蒲田」が開業した。羽田空港へのアクセスも良く、訪日外国人らの利用を見込む。

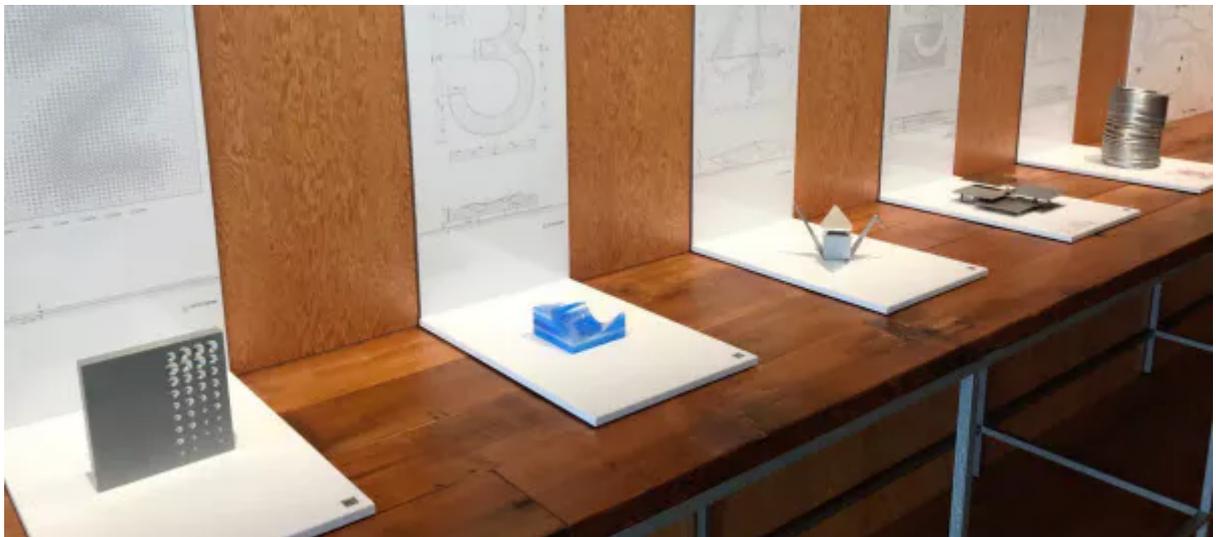
【前回記事】 [下町ボブスレーの先へ 世界に挑む「三銃士」](#)

■ 旋盤がお出迎え



ホテルの入り口には古い旋盤機が置かれている

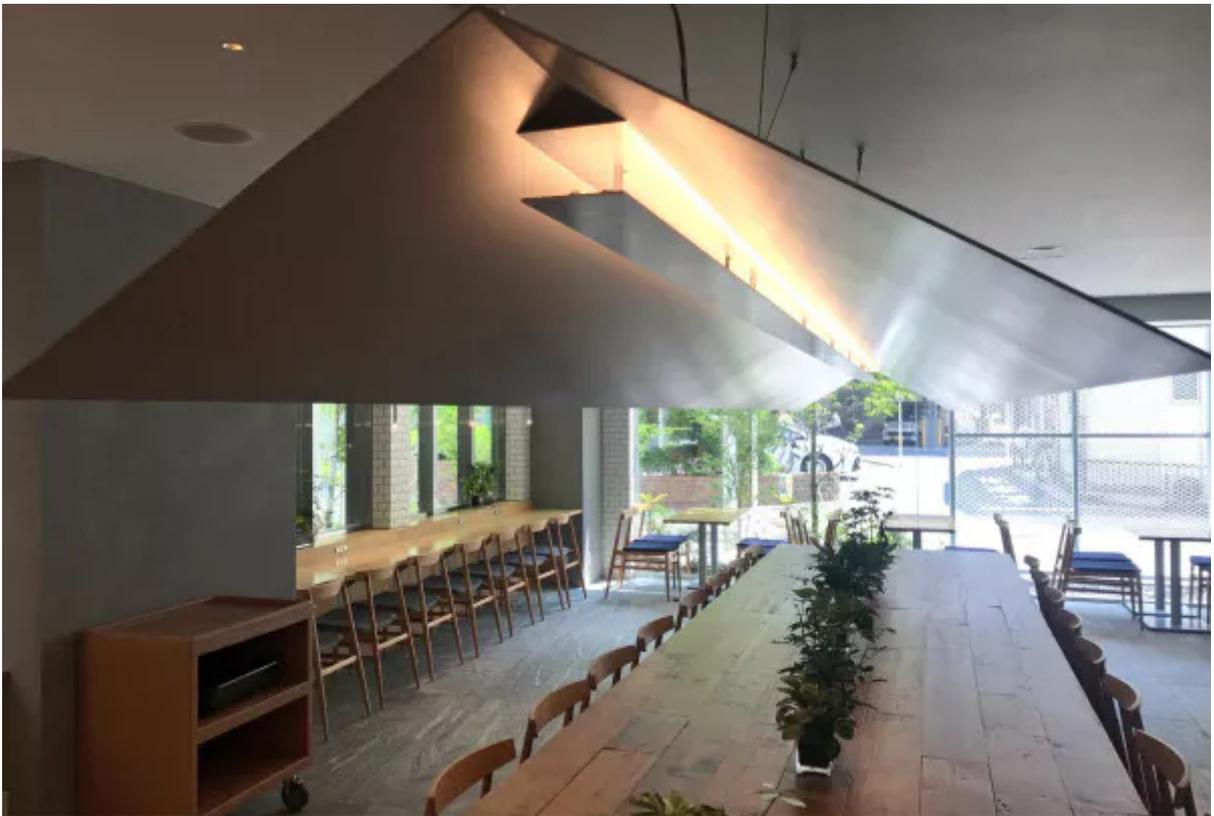
さまざまな仕掛けが宿泊客をもてなす。入ってすぐ、古い旋盤機に出迎えられて驚く。さらに進むと、金属の切削や曲げといった技術을展示する一角があり、その先がフロントだ。客室の各フロアでエレベーターの扉が開いて目に入る階数表示にもこだわりがある。4階はスチール板を折って4を表現し、6階では濃淡が異なる青色の亚克力板を張り合わせて6をかたどり、複雑な色のグラデーションを出した。



「掘る」「削る」「折る」。ホテル内には町工場の様々な技が誇らしげに飾られている

ホテルのテーマは「町工場」。「ここでしかできない体験を提供したい」と運営するホテルマネジメントジャパン（東京・渋谷）の担当者は説明する。施設内の演出にとどまらない。町工場などの見どころを紹介する観光アプリも用意し、周辺の散策も楽しんでもらう。近隣のホテルと違いを出すためのサービスは訪日客に加え、国内の女性グループなどの評価も高いと胸を張る。

■ホテル計画に「まいったなあ」



6メートルの鉄板を曲げて作ったスチールルーフは関鉄工所が手掛けた

ホテル内にあるカフェのテーブルの上を、全長6メートルもの大きなスチール製の照明傘が覆う。これも特殊な折り曲げ技術による。地元の金属加工業、関鉄工所が作った。

「まいったなあ」。2018年夏、町工場をテーマにホテルをつくりたいと相談された社長の関英一（48）は戸惑っていた。関は町工場で組織する大田工業連合会の青年部連絡協議会の委員長を務め、下町ボブスレーにも関わるなど同業者の信頼が厚い。

図面通りのものづくりなら右に出るものがない町工場の職人たちだが、デザイナーからの「こんな感じでできないか」という感覚的な注文には面食らってしまう。「金属を曲げた角にもっとエッジを利かせられないか」と言われても、多少の丸みは金属加工ではやむを得ず、職人にすれば「それはできない」となる。「正直うまくいかないのでは」との不安も関の頭をよぎった。

■デザイナーと職人結ぶ



デザイナーを工場に案内したり、職人から「こういうことならできそうだ」と提案してもらったり、コミュニケーションを深めながら、双方を近づけていった。日ごろ手掛ける機械の部品などは一般の目に触れることはなく、武骨であっても機能に支障なければ顧客も文句は言わない。だが、ホテルを彩るものとなると話は別だ。溶接一つをとっても、接合できていれば良いわけではなく、光が当たった際の見

町工場の魅力が詰まったホテル（ホテルオリエンタルエクスプレス東京蒲田）

た目など、経験したことのない繊細さを求められた。十数社の町工場が協力したが、通常の加工なら2～3カ月で納品できる作業に約2倍の4～5カ月を費やした。

19年春、ホテルの内覧会があった。手掛けた町工場を記すプレートも飾られた階数表示などを眺め、余韻に浸る職人たちの姿があった。「お酒がなかったのに超盛り上がりましたよ」。関は思い出して笑った。「守秘義務などで日ごろは見せることができないものばかり。ホテルでは仕事を見てもらえる」。喜びに加え、「設計図のないデザイナーとの仕事の進め方が分かるようになった」ことも参加した町工場の財産となった。

■ひよんな出会いから思わぬ依頼



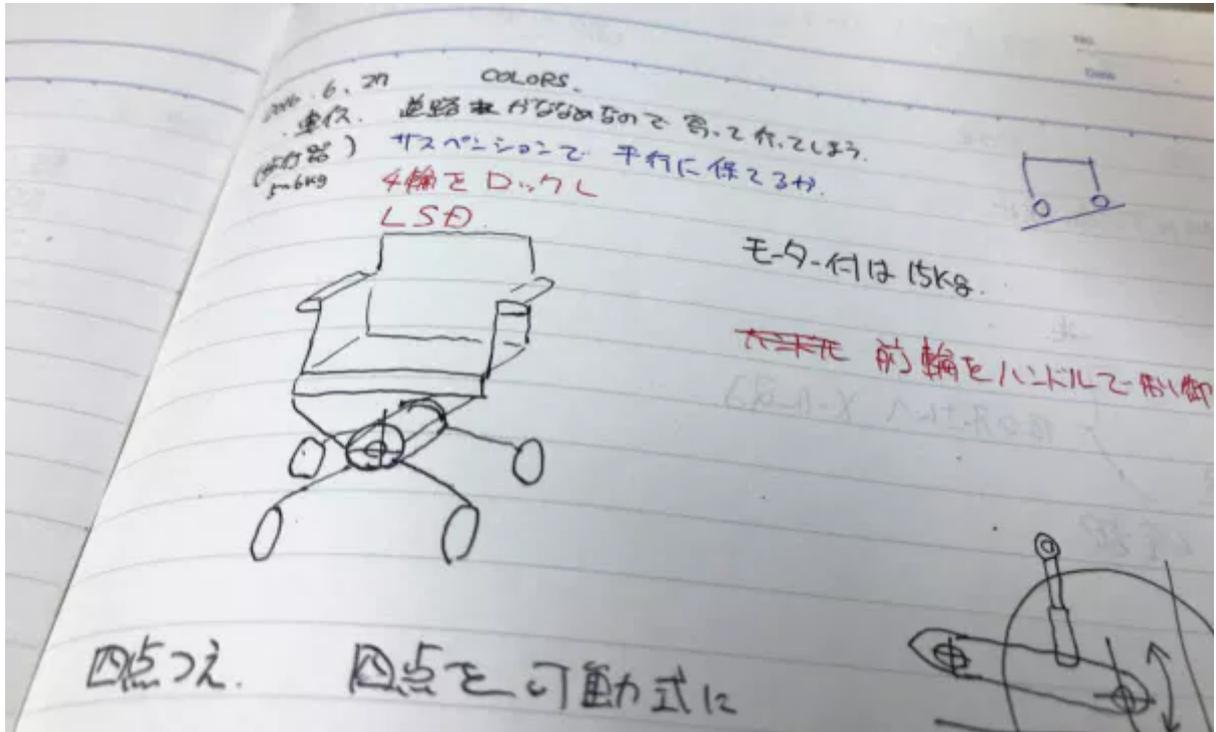
車いすに座る関英一と在宅介護会社、カラーズの田尻久美子。二人三脚で開発を進めた

関は3代目社長。当初は家業を継ぐ気はなく、学校卒業後は包装容器メーカーに勤めていた。ホテルの仕事が突然舞い込むように、関は異業種から巻き込まれやすい。いま取り組むのは新機能の車イス。これもひよんな出会いがきっかけだった。

大田区の商工会議所の会合で関は田尻久美子（44）と名刺を交わした。田尻は在宅介護サービス、カラーズの社長として地域密着で福祉サービスを提供する。関は町工場お決まりの社交辞令として「何でも作れますよ」と話しかけた。田尻は額面通り「あ、なんでもいいんだ」と受け取った。

田尻は介護用品を自社で開発する夢を以前から温めていた。協力してくれそうな地元の町工場を探していたなかでの、関の「前向きな」発言に飛びついた。「そんな意味で言ったんじゃないけどな」。後で関は苦笑いすることになる。

■あてもなくアイデア練る



関のノート。「動かしやすい車イスを」との依頼を受けてイメージを膨らませた

16年6月、打ち合わせが始まった。と言っても作るものが決まっていたわけではない。「倒れないつえ、なんてどうでしょう」「片手しか使えない人用の洗濯挟みなどは」。アイデアだけは次々出たが、現実的でなかったり、すでに世に出ていたりで断念した。

話し合いの末に決めたのが、快適に動かせる車イスだった。介護する側も高齢者という「老々介護」の時代を迎え、車イスを押すのも一苦勞となっている。例えば道路の端など傾斜のある場所で真っすぐ進むには従来の車イスでは腕力が結構求められる。ちょっとした段差も越えるには力が要る。そうした課題の解決を目標とした。

最初の試作品では主要な車輪である駆動輪を通常より前に取り付けた。その方が乗り上げる際に力を入れなくて済むと考えた。前後のバランスが悪くなるため車体の後方に小さな補助輪を付け、前輪はぐらつかないように固定して直進しやすくした。

■福祉とタッグ、補完関係

町工場と福祉という異色のタッグだが、思わぬ力を発揮する場面もあった。開発資金として区の助成金を得たいと思ったが、関には行政機関と交渉する経験は乏しかった。だが、福祉の世界では行政機関とのやり取りは日常茶飯事で、田尻はうまく話を進めた。逆に関の専

専門用語は田尻にすると「何言ってるか半分くらいわからない」。バイクのメカに詳しい従業員に「通訳」してもらいながら構造を理解した。

助成金申請のためのプレゼンテーションは念入りにリハーサルして臨んだ。画像を見せるために必要なディスプレイは協力工場から借りた。関は大田区の町工場が古くから育んできたつながりのありがたさを改めてかみしめた。開発を始めて2年が過ぎ、車いすの試作は5号機まで数えた。19年度中に製品化にこぎ着けたいという。「こんな大ごとになるなんて」。最初のたわいないあいさつから、関も田尻も想像もしていなかった製品が形になろうとしている。



試行錯誤の末に開発した5号機をもとに最終製品を目指す

■新たな出会いを求めて

関は地元の商店街の会合によく出向くようになった。「寸胴の取っ手が外れたら引っ付きますよ」。気さくに話しかける。「職人が気むずかしそう」など町工場の取っつきにくい印象を和らげたいためだ。そうした交流から、「新たな仕事生まれる。人助けにもなる」。異業種との仕事は「それぞれの分野のプロとの対話」。ぶつかり合いから新たな価値を生み出していく。



関は町工場のイメージを変えようと努める

そんな姿勢が口コミで伝わったのか、関の鉄工所には「文鎮を軽くしたいので穴を開けて」「家具店で買ったテーブルの脚を短くしてほしい」といった依頼が舞い込むようになった。

た。「必要なときに使う習慣ができれば、もっと町工場に近い存在になる。小さいころから親しんだ子どもがものづくりに関心を持ち、担い手になるかもしれない」。遊び心を伝えたいと、町工場が技術の粋を注ぎ込んだコマの競技大会にも関わる。

あらゆる「もの」をインターネットでつなげ生産性向上にも有望視される「IoT」や人工知能（AI）など、製造現場にも新たなイノベーションの波が押し寄せている。そうしたなかで、日本のものづくりに欠かせない基盤として大田区の町工場が培ってきた技術やノウハウ、協力関係をどう受け継ぐか。経営者たちはそれぞれに試行錯誤しながら、次代を切り開こうとしている。

= 敬称略、おわり

(秋山文人)

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.